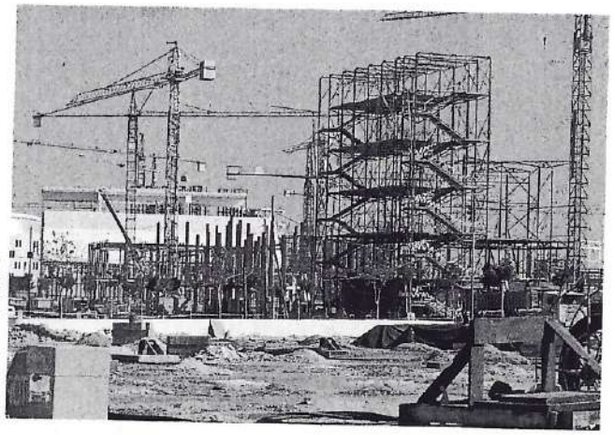
セビリア便り

永川玲二



万博会場も急ピッチで建設された

グァダルキビールの今と昔

古都セビリアはこのところ刻々と変貌しつつある。コロンブス五百年祭の万国博を今春にひかえて、町中どこを歩いてみても工事中だ。新しい道路ができる。ビルが建つ。鉄道線路は地下にもぐり、広い原っぱの真ん中にマドリードからの新幹線の駅とやらが出現した。それにもまして目ざましい変化は、古代ローマ帝国以来この町の動脈だったグァダルキビール川に超近代的デザインの新しい橋が六つもできたことだ。

コロンブスやマゼランがここで探検航海のための船団を組んだころ、セビリアにはまだ一本も橋らしい橋はなかった。いまの闘牛場に近いトリアーナ橋の位置に、小舟を並べ板を渡した舟橋が一つだけかかっており、毎朝市内に生鮮食料を運びこむ荷車の行列と、郊外の牧草地に行こうとする羊の大群とがぶつかって、ひどい騒動だったという。してみると、人口五万そこそこの当時のセビリアも交通地獄に無縁ではなかった。

トリアーナ橋がようやく石造りになったのは十九世紀のことらしい。それ以来ほかにも橋ができて、一九七〇年に私がはじめてセビリアに住みついたころには合計四つになっていた。人口は当時すでに六十万を超えていたが、自動車が少なかったせいか、朝な夕なに人間も車もゆったり渡ることができた。にわかに混雑しはじめたのはごく最近。郊外のベッドタウンが膨張し、自家用車がむやみに増えてからだ。川岸にあるわが家の屋上から眺めると、ラッシュアワーにトリアーナ橋を埋めつくす車の列は一向に動く気配もない。コロンブス時代の混乱を別のかたちで五百年後に大規模に再現したというべきか。

もっと川上に目を移すと、先日開通したばかりのカチョーロ橋が見える。これは万博会場への出入口にあたるだけに、設計コンテストで思いきり派手な意匠が選ばれたのだろう。両側の歩道にプラスチックの日除けがあり、白っぽいベージュのパラソルを何十本か長々とつなぎ合わせた感じである。その下でゆるやかな弧を描く太い橋梁は濃いブルー。パラソル越しに上半身を見せている万博会場のパビリオン群は色とりどり。色彩ばかりか形までがそれぞれ奇想天外で、どこか別の惑星の未来都市を思わせる。

バスはセビリアの市民の足

スペインでもオートバイは若者に大人気

新旧の橋で

過去と未来が鉢合わせ

セビリアの中心街は昔も今もグァダルキビール左岸にあり、大航海時代にアメリカから船が帰ってきたときにも、提督や高級船員はそちらに泊ったものらしい。水夫たちは右岸の貧しいトリアーナ地区——江戸にたとえれば川向うの本所、深川あたりだろう。いま私がいる百軒長屋の雰囲気も熊さん、八つぁん、大屋さんの古典落語そっくりだが、どうやら歴史の気まぐれによって、そのトリアーナのすぐそばに斬新きわまる未来都市が姿を現すことになった。過去と未来との鉢合わせがどんな結果をもたらすやら。合計十本にまで増えた新旧の橋を渡るたびに、この下町の今後の成りゆきを見とどけたいと近ごろ私は思っている。